

Interview 1 インタビュー

BNNの自覚さんには防災において地域を守るというお寺の役割についてお話ししたかった。

次に紹介するのは東日本大震災被災地支援に赴きその活動の中で、自分の地域で災害が発生したときお寺は与すべきかを考えついに行政から指定避難所の認定を受け、地域住民の方々と一緒に防災活動を取り組み始めた寺院を紹介します。

支援活動を通して自分の寺を避難所に

群馬県 仁叟寺住職 渡辺啓司 師(曹洞宗)

副住職(渡辺龍道師)が東日本大震災被災地支援のため、福島県南相馬市の新祥寺に赴き、うちのお檀家さんから預かった支援物資を届け、物資に込められた復興支援への思いを伝えてまいりました。一般の避難所とは違い、寺院の避難所ではご遺骨を安置することができます。毎日ご遺骨の前で、避難されてきた方々と一緒に祈りを捧げることで、心のケアに繋がっていたのではないのでしょうか。また、この地にも南相馬市から避難された方々がいて、その中に新祥寺のお檀家さんもいらっしゃる、そんなご縁もあり、震災で亡くな



馬市から避難された方々がいて、その中に新祥寺のお檀家さんもいらっしゃる、そんなご縁もあり、震災で亡くな

高崎市で民間初の指定避難所

副住職の体験を基にこの地において災害が発生したとき、私は仁叟寺で何かできるかを考え、そしてこの寺を避難所として開放しようと決意しました。平成二十四年の六月に高崎市の防災課に相談しましたが、前例がないということで、時間がかかりましたが、地域の方々にも協力を仰ぎ、行政には民間施設の活用を促しました。そして平成二十四年八月に高崎市長宛に緊急防災避難所指定願を提出し、翌年の平成二十五

年五月に高崎市では民間で最初となる避難所の認定を受けました。ここに至る過程で、行政



緊急防災避難所指定願 仁叟寺

に、寺院備災ガイドブックは大変役立ちました。

備災は「いのちの根」のところで一緒にやる

避難所認定を受け、その後の地域住民との繋がりはどのようになりまし

ます。ありがたかったのは、企業から大型自家発電機、簡易トイレ、災害時に対応できる飲料水の自動販売機が寄贈されたことです。そこでオンラインショップを兼ねて仁叟寺会場として、平成二十五年十一月に初めて防災訓練を行いました。行政の担当者を始め、消防署、消防団、近隣の学



渡辺啓司 (わたなべ けいじ) 師

校の先生、それに地域住民が加わり、約百名が集まりました。また、今後年一回の避難訓練のほか、民生委員の方と二人暮らしの老人や未就学の子どもたちをどう避難させるかなど話し合いをしてい

くこともありました。

寺院が避難所になることによって、地域の方々喜んでくれました。備災は、寺院を含めて地域の方々共有できる課題です。地域の方々がついて安心して暮らせる環境づくりに、深も宗教関係ありません。もし災害が発生した場合、行政だけでは対応できないと思います。もっと民間の活力を受け入れて欲しいと思っております。私たちが正しいのちという根拠、このころで地域の方々結び付けていけばいいのではないのでしょうか。

Interview 2 インタビュー

次の紹介は東日本大震災発生を機に仏教会を設立され、現在では行政と良好な関係を築かれた仏教団に、設立に至る経緯と今後の活動について伺いました。

一寺院の活動では限界

釜石仏教会設立を発起

釜石仏教会
芝崎 惠應 師(白蓮宗 仙寿院)

どのような経緯で釜石仏教会を設立されたのかお教えてください

釜石仏教会は釜石市と大槌町の伝統仏教寺院十七ヶ寺で構成しております。仏教会設立以前は、保護司会を通じて他宗派の

支援活動を通して自分の寺を避難所に

群馬県仁叟寺住職 渡辺啓司 師 (曹洞宗)

仁叟寺が避難所になった経緯をお聞かせください

副住職(渡辺龍道師)が東日本大震災被災地支援のため、福島県南相馬市の新祥寺に赴き、うちのお檀家さんから預かった支援物資を届け、物資に込められた復興支援への思いを伝えてまいりました。一般の避難所とは違い、寺院の避難所ではご遺骨を安置することができます。毎日ご遺骨の前で、避難されてきた方々と一緒に祈りを捧げることで、心のケアに繋がっていたのではないのでしょうか。また、この地にも南相馬市から避難された方々がいて、その中に新祥寺のお檀家さんもいらっしゃる、そんなご縁もあり、震災で亡くな

られた方々の百カ日法要を当山で厳修しました。それらの活動の中で、避難所としてのお寺の必要性を感じたそうです。

高崎市で民間初の指定避難所

副住職の体験を基に、この地において災害が発生したとき、私は仁叟寺で何ができるかを考え、そしてこの寺を避難所として開放しようと思案しました。まず、平成二十四年の六月に高崎市の防災課に相談しましたが、前例がないということで、時間がかかりましたが、地域の方々にも協力を仰ぎ、行政には民間施設の活用を促しました。そして平成二十四年八月に高崎市長宛に緊急防災避難所指定願を提出し、翌年の平成二十五年五月に高崎市では民間で最初となる避難所の認定を受けました。ここに至る過程で、行政を説得する際に、「寺院備災ガイドブック」は大変役立ちました。

備災は「いのち」の根っこのところで一緒にやる

避難所認定を受けその後の地域住民との繋がりはどのようになりましたか

まずありがたかったのは、企業から大型自家発電機、簡易トイレ、災害時に対応できる飲料水の自動販売機が寄贈されたことです。そこでデモンストレーションを兼ねて仁叟寺を会場として、平成二十五年十一月に初めて防災訓練を行いました。行政の担当者を始め、消防署・消防団・近隣の学校の先生、それに地域住民が加わり、約百名が集まりました。また、今後年一回の避難訓練のほかに、民生委員の方々と、一人暮らしの老人や未就学の子どもたちを、どう避難させるかなど話し合いをしていくことも決まりました。

寺院が避難所になることによって、地域の方々が喜んでくれました。備災は、寺院を含めて地域の方々がずっと安心して暮らせる環境づくりに、宗派も宗教も関係ありません。もし災害が発生した場合、行政だけでは対応できないと思います。もっと民間の活力を受け入れて欲しいと思っております。

私たちは「いのち」という、根っこのところで地域の方々と結びついていけばいいのではないのでしょうか。